

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第 14 号 2021 年 11 月 1 日

目 次

巻頭言

南山大学の知的系譜と人類学研究所「小川文庫」……………松田 京子……2

回想の中の南山

奇蹟の導きをいただいて……………浅野 享三……4

社会探究ゼミ論文集……………岡野 成利……6

48 年間お世話になりました……………田中 雅行……8

南山国際の「日本一」……………高橋 晴之……10

探ろう！私たちの学校に込められている『こころ』

一子ども版 12 周年記念誌をつくろう—……………水越 建太……12

南山発見

続・南山学園の戦争遺跡……………永井 英治……14



南山大学附属小学校制服（2021 年撮影）

巻頭言

南山大学の知的系譜と人類学研究所「小川文庫」

松田 京子

今年、南山大学は創立 75 周年を迎えたが、南山大学の初期の知的系譜をたどってみると、今から百年近く前の 1928 年に、当時、日本の植民地であった台湾に設立された台北帝国大学と浅からぬ繋がりがあることに気づく。このことは、永井英治氏が指摘するように、「戦前・戦中期における人類学の拠点であった台北帝国大学・京城帝国大学」に代わり、戦後、新制大学の中に求められた新たな拠点の一つとして「東京大学教養学部の文化人類学、東京都立大学の社会人類学」とならび「南山大学の人類学」があったこと¹、深く関連しているだろう。とりわけ台北帝国大学に籍をおき、植民地統治期に「高砂族」と呼ばれた台湾先住民に関する研究に従事した日本人研究者の多くが、戦争の終結によって日本「内地」に引き揚げた後、南山大学と様々な形で関係を結んでいる。

その代表的な人物として、浅井恵倫（1895 - 1969）がいる。浅井は、東京帝国大学文科大学言語学科を卒業後、言語学、特に「オーストロネシア語系諸言語を専門とする言語学者²」として、1923 年にはじめて台湾の紅頭嶼を訪れ、この地で暮らす台湾先住民の言語（「ヤミ語」）の研究を開始したという。その後、この台湾先住民の言語をテーマとして博士論文を執筆し、1936 年にオランダのライデン大学で学位を取得している³。

また 1930 年代初めから、浅井恵倫は、台北帝国大学文学部言語学教室の教授であった小川尚義（1869 - 1947）とともに、台湾先住民の諸言語に関する実地調査を台湾全島で行い、その研究成果として小川との共著『原語による台湾高砂族伝説集』（台北帝国大学言語学研究室編、

刀江書院、1935 年）を刊行した。同著は網羅的な実地調査に基づく体系的な著書として高い評価を受け、小川尚義名義で 1936 年に学士院恩賜賞が授与されている⁴。



日本統治期後期の台湾中南部の民族分布に関する調査地図
（南山大学人類学研究所「小川文庫」資料、
「1-1-1 熟蕃材料」所収）

同じく 1936 年、小川尚義の退職にともない、浅井恵倫は台北帝国大学文政学部言語学教室助教授に就任し、その後、戦争終結まで約 9 年間勤務した。浅井は、戦後も国立台湾大学（台北帝国大学から改称）に留用され約 2 年間台湾にとどまり、1947 年に日本「内地」に帰還することとなった。その後、金沢大学教授などを経て、1957 年に南山大学に教授として着任した⁵。

1958 年 4 月、南山大学で初めての大学院として、社会科学部文化人類学専攻修士課程が設置され、民族学、言語学、先史考古学の 3 領域を網羅する科目が設定されたが、浅井恵倫は「言語学方法論 比較言語学特講 同演習⁶」の担当者として、また修士課程の完成をまって

¹ 永井英治「解説」（南山学園史料室編『南山学園史料集 6 南山大学の人類学』、南山学園、2011 年）、P.66。

² 清水純『画像が語る台湾原住民の歴史と文化 鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探究』（風響社、2014 年）、P.7。

³ 土田滋「[人と学問] 浅井恵倫」『社会人類学年報』第 10 号（1984 年）。

⁴ 同上。

⁵ 同上。

⁶ 「大学院社会科学部文化人類学専攻修士課程設置認可申請書」（1957 年 11 月 15 日）第九、職員組織 四、大学院研究科専門課程別教員予定（前掲『南山学園史料集 6

1960年4月に設置された文化人類学専攻博士課程においては、「言語学特研」の担当者として、南山大学の初期の大学院教育にも寄与した⁷。このような浅井の教育・研究の基盤の一つに、実地調査にもとづく言語資料の採集という台湾での研究活動や台北帝国大学での教育経験があったことは間違いないだろう。



台湾総督府の名入りの罫線紙に書かれた文書リスト
(同「小川文庫」資料、「1-5-9 新港文書」)

浅井恵倫は、1930年代に行った台湾先住民の集落をめぐる実地調査によって、膨大な言語資料を採集するとともに、台湾先住民に関する多数の写真を撮影した。さらに動画フィルムや音源資料も残しており、これらは「貴重な民族誌的資料」として近年、再評価されている⁸。これら浅井が残した資料に加え、浅井が小川から受け継いだと思われる小川尚義関連資料は、浅井の死後、遺族より東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に譲られ、「小川・浅井コレクション」として同研究所に所蔵されている⁹。

しかし台北帝国大学教授であった小川尚義が、台湾における研究の展開の中で作成・収集したと思われる貴重な資料については、その一部が南山大学にも所蔵されている。南山大学人類学研究所の「小川文庫」である。

「台湾言語学の創始者¹⁰」とも評される小川尚義の台湾諸言語に関する研究は、『日台大辞典』『台日大辞典』をはじめとした辞書編纂に結実するとともに、先述の『原

語による台湾高砂族伝説集』に代表されるような台湾先住民言語の研究の進展をもたらすものであったが¹¹、人類学研究所「小川文庫」の資料は、そのうちの台湾先住民に関連するものがほとんどである。



台湾先住民（「ブヌン族」）に関する調査ノート・調査資料
(同「小川文庫」資料、「2-3-1 ブヌン語単語集」、
「2-3-2 Vunnung」、「2-3-3 ブヌン口碑伝説」、
「2-3-6 ブヌン蕃語集」)

「台湾総督府」の名が入った罫線紙にインク書きされた台湾先住民の各種資料や、ノートに丁寧に記された台湾先住民言語の単語集、当時「蕃地」と呼ばれた台湾先住民居住地の地図など、150点を超える「小川文庫」の資料の内容は多岐にわたっている¹²。これらの資料は、台湾先住民研究にとって貴重であるのはもちろんのこと、研究所所蔵資料という南山大学の知的財産が、どのような歴史をもち、どのような系譜に繋がるのかを考える上でも、貴重であるといえよう。

(南山大学人文学部教授)

南山大学の人類学』、P.37)。

⁷ 南山大学五〇年史作成小委員会編『南山大学五十年史』(南山大学、2001年)、P.68～71。

⁸ 例えば、前掲『画像が語る台湾原住民の歴史と文化』など。

⁹ 『小川尚義・浅井恵倫 台湾資料研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2005年)。

¹⁰ 李壬癸(土田滋訳)「南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料」『南山大学人類学研究所通信』第8号(2000年)、P.2。

¹¹ 林初梅「言語学者・小川尚義とその時代」(林初梅編『小川尚義論文集〔復刻版〕 日本統治時代における台湾諸言語研究』、三元社、2012年)。

¹² 南山大学人類学研究所「小川文庫」の資料目録については、前掲『小川尚義・浅井恵倫 台湾資料研究』P.131～P.141に、「小川尚義・浅井恵倫資料」(南山大学人類学研究所所蔵分)として、掲載されている。

回想の中の南山

奇蹟の導きをいただいて

あさの 浅野
けいぞう 享三

「言うこと聞かない子がいたら、叩いても良いですから」と、にこやかな表情から思いもかけないことばが飛び出した。今から40年前の1981年4月初め、留学先のニューヨークから帰国した翌日に、いりなかの南山中学校男子部を訪問したときのことだった。ことばの主は副校長の山田一美神父だった。やんちゃな男子中学生向けの対応策を授けようとしたのであろう。しかし、時折り首を傾げながら朴訥な話し方をする人から発せられたことばとは、にわかには信じられなかった。ほんの数日前まで、学習者中心の最先端外国語指導法を学んでいた私は、いきなり現実を突き付けられたようで大いに困惑した。

南山との出会いは、外国語学部英米科(当時)に入学した年に遡るのだが、「ナンザン」に初めて接したのは、もう少し前だった。私が通った下町の小学校に一人だけ「ナンザン」に進学する女子がいた。卒業式後に撮影したと思われる集合写真には、セーラーではない濃紺の制服を着た子が写っている。中学は歩いて10分ほどの学校に通うものと思っていた私には中学受験は無縁だった。「ナンザン」にも無知で、どういう漢字を当てるのかにも無関心だった。ただ、最前列左端に立ったベレー帽姿と、/nan-zan/という何かしら重厚な響きのことばだけを記憶に残す1965年の春だった。



筆者、岡部朗一先生ゼミ 1976年

1973年大学入学後、最初の英会話クラス担当はアルフ

オンゾ・ハツツェ神父だった。先生は大柄な風貌で、授業中は **You're wasting time!** などと性急に発言を求め、相当な威圧感があった。外国人の先生による授業は初めてだったこともあり、私は自然と後部座席に着席する習慣があった。しかし女子学生の中には、最前列に陣取り、英語で何かしらのやり取りをする者たちがいた。授業後に先生に肩を抱かれて談笑する光景は、畏怖と違和の両方を覚える異文化そのものだった。司祭を「神父様」と言及する彼女らは、それはまあ上品で、成熟した大人の女性に見えた。まるで別世界の出来事のような感覚だった。

大学では ESS に所属し、当時はまだ特別感があった英語の習得に没頭した。ESS では今川憲次先生、シスター・ルース、ロバート・リーマー神父と出会った。春と夏には一緒に合宿に行き、英語だけで数日を過ごした。大所帯の ESS だったので移動はバス数台、宿舎も貸し切りだった。おかげで、館内でも英語だけの時間を過ごし、ハイキングやクックアウトも体験した。合宿最終日に日本語解禁となっても、英語が先に口をついて出るという経験をした。その後、リチャード・ジップル先生とウィリアム・ブルッカホフ先生が加わった。このときの外国語体験は、自分のその後の人生に決定的な影響を及ぼした。



南山高校国際部の生徒と 1985年頃

まだまだ未熟な筆者であるが、来し方を振り返ることが増えた。出会った南山はまさに奇蹟の象徴である。1982

年、28歳で南山中・高に就職し、その後学園の事情で豊田市の南山国際中・高教諭に転籍した。出会った帰国・外国人生徒らには実に手を焼いた。が、この子らが導き、成長させてくれた。人生の誇りである。2004年には南山短期大学に移籍し、懐かしのいりなかに戻ったものの、短期大学部として再出発するのに伴い 2011 年に山里の地に移った。短大時代は「楽しかった」のひと言で表現できるが、学生らは常にひたむきな努力ができた。短大部は、学園の将来構想の一環で閉学となり、2018 年からは、自分が学生として縁があった大学英米学科に移籍した。必ずしも自らの都合ではなく単位校を巡り、最後に「ふりだし」に戻ってくるという教員人生など、誰に仕組めたであろうか。奇蹟だと、私は確信している。

奇蹟はいかにして起きたのか。想像してみると、日々いただいた味わい深いことばが浮かぶ。思い起こす導きのことばを感謝を込めて記す（敬称略、ほぼ時系列）。

「英語で団地のことは housing development と言えます」西脇博。「翻訳はね、全て誤訳なんだよ」長坂源一郎。「オレの授業で寝たのは、お前だけだ」岡部朗一。「どんな子でも期待をかけてやって欲しい」横尾一夫。「来年度は、間違いなく採用できるから」福山徹。「学園はこんな劣悪な環境で授業させるのか」浅野尚。「みんなにええ顔はできん、管理職は」伊藤紫朗。「廊下に立たせても、生徒には授業を受ける権利があるから」小林武昌。「何としてでも、やらないかん」須田一男。「正論が言える先生ですね」下家善樹。「Time 誌の講読会に来ませんか」松岡博。「発音問題ダメだよ、それでは。音節に分けて」平川博。「私を、糾弾するのですか」西田博。「はい、もういいです。明日また考えましょう」ロバート・リーマー。「先生たちも、揣摩臆測で語ってはね。みんなルサンチマンの世界だから」松浦達雄。「南山学園で学んだことを生涯の誇りとします（小島講堂掲示）」小島鎌次郎。「先生は、0（ゼロ）を1（いち）にできるから」三輪典由。「天職だわ、先生には教員が」平田敏江。「すごいねえ、先生は！」谷川義美。

「素性の分かった人に来てもらった方が…」山田瀧満。「来てもらって良かったと、言われる人になって」水野道子。

「論文はね、報告書と違う」鈴木貞夫。「Invention が後にくる理由は、なに」近江誠。「彼は、天才なの」田中良子。

「What will you have for lunch?」ビル・クマイ。「先生、とにかく論文です、大学は」芳賀進。「少しでも『共著』と、書く人いますよ」中田晶子。



南山短期大学学生と 2008 年

「言いたいことは言語化するべきです」丹羽牧代。「It's like a game!」デヴィッド・クルーギ。「まだ4年もありますから」鈴木達也。



英米学科ゼミ卒業生と 2021 年

ここに記し切れないほどの導きをもらった40余年で、励ましや指摘はむしろ名を残さない生徒や学生、保護者からのほうが多い。しかしあの日、なぜか担任でもなかった私を国際部の廊下で見つけた生徒がこう言った。

「先生は、いつも自分が正しいと思ってるでしょ！」何の脈絡もなくただそれだけ言って、走り去った。そのとき、何と答えたのかどうしても思い出せない。しかしそう指摘されたことは、今もなお導きとなっている。ありがとう、難波謙太郎君。



国際部職員室（現ライネルス館）にて 1985 年頃

（南山大学外国語学部教授）

社会探究ゼミ論文集

岡野 成利

1. はじめに

先日、これまでの「探究ゼミ」の論文集を南山アーカイブズに収蔵していただきました。毎年5センチ近い厚みがある冊子になるのですが、これを2013年度のものから7冊ですからかなりの重量です。しかし、これらの冊子は、「探究ゼミ」に関わった教員、そして実際にゼミで論文を書いた生徒たちからすれば、実際の重み以上におもたいものです。

2. 探究ゼミについて

そもそもこの「探究ゼミ」とは何か、といいますと、現在男子部の高校二年生文系の生徒を対象にして、1単位（週あたり1時間）で設けられている学校設定科目です。その名の通り基本的にはゼミ形式で、少人数で、文献を精読したり、何らかのテーマについて調査・考察して発表を行ったりすることを中心とした科目です。黒板にチョークで教科書の内容のまとめをしたものをノートに筆記させるという、知識技能の一方的な伝授という従来型の中高の教育とは大きく異なるものです。

最初は、現行のカリキュラムを検討する中で、高校2年の文系のみ社会科が一時間担当できる時間が増えたことからでした。はじめは日本史に充てるつもりでしたが、教科の先生たちと「何かもっと面白いことはできないだろうか」という雑談をしていたところから、だんだんと大きくなって生まれてきたものです。そもそも男子部の社会科教科会には昔から「本質的な学びに迫りたい、生徒たちに深い教養を追いかける面白さを感じさせたい」という伝統がありました。だから、私がゼミ形式の学びを行ってはどうか、と提案したときに、教科の先生方は真剣に取りあってくれました。そもそも私たちは教科としてどのような力をつけたいのか、という原点から行ったこの議論は、教科の共通の財産になったと思います。完全六年一貫の学校だからこそできる、地理や歴史といった科目の違

いや、教科書のワクすらも越えた、六年間の南山の社会科学学習の集大成となるような学びの形はできないものだろうか、と教科のメンバーで考え、創り上げていったもの、それがこの「探究ゼミ」です。この段階で決めたことは、以下の通りでした。

《何か社会的な内容を、(通常の授業形式ではなく)書物を精読したり、あるテーマについての文献を読んだり、深く掘り下げるような手法をとって行う。社会科教員全員で行うが、負担が大きくならないよう、前期・後期に分けて、一人の教員が担当するのは半期にする。前・後の講座でペアを組みコースを設け、生徒はそれを自らの希望で選択する。その際、担当教員で選ぶのではなく、コース内容、講座内容、そして希望する進路から選ぶように指導する。》

社会科の教員は8人しかいませんので、開設コース数を増やすために宗教科にも呼びかけ、快諾していただきました。そして、前期後期それぞれ、最後にまとめとして論文(実際にはレポート程度のものですが)を書くことを必須としました。つまり文系の生徒は全員2回レポート提出することになるわけです。これは成績をつけるためでもあります、それぞれがゼミで深めた学びをまとめ上げるために必要だと考えたからです。この論文をまとめたものが、今回アーカイブズに収蔵していただいた論文集です。

3. 探究ゼミの歩み

2013年に最初のゼミが行われて、翌年にその年の論文集を発行しました。これは最初に思っていた以上に分厚く重い冊子になりました。嬉しいことに、これを見てくださった他教科の先生方の中から、自分も講座を出しても良いよ、との申し出を受けて、三年目には国語や理科の先生が新たに講座を設けてくれました。また、女子部に異動された社会科の先生が引き続きゼミを持つという形で、

二年目には女子部からも講座がでることとなりました。さらに四年目にはついに大学の先生が二名講座を出してくださいました。これは社会科の展示室が大学の人類学博物館と連携して展示を行っていることからのつながりと、学園アーカイブズのつながりによるものです。特別にアーカイブズのあるライネルス館で学園史のゼミを行ってくださったこともありました。それ以後現在までに美術の先生や英語科の先生も講座を出してください、この「探究ゼミ」は確実に発展してきました。他教科の先生方も、ゼミは大変だけど面白い、と、楽しんでくださっています。(当初は「社会探究ゼミ」と言っていたのですが、他教科の先生方も参加してくださいましたので「探究ゼミ」と改称しました。) 私がゼミでよく取り上げる鲁迅は「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」と書いています。ここから先、他教科でも同じような取り組みが出てきたり、他単位との連携により深まって、こうした学びがもっともっと広がっていけば、この新しい学びは更に次の段階にステップアップできるのではないのでしょうか。

なお、ここまで順調に育ってきた「探究ゼミ」でしたが、2020年は新型コロナウイルス感染症の影響で、はじめて逆風にさらされました。集団で議論したり、発表したりする、という形が防疫の観点から好ましくないのでは、ということで、ゼミ形式の学びは実質中止せざるを得ず、この年は社会科のメンバーだけでテーマを絞っての講義形式のものとなりました。2021年度は感染症予防に細心の注意を払いつつ従来の形式に戻してゼミ形式をとっています。

4. アーカイブズに収蔵していただくに際しての思い

教育のあり方を巡って、明治以来の知識注入型からの脱却、ということが言われるようになって久しくなります。ですが未だに新しい形はこれだ、というものは見えてきていません。そんな中でこの「探究ゼミ」は男子部なりの新しい教育の姿の模索の試みとなっていると思います。いつの日か新しい教育が新しくなったとき、南山男子部の学びの過渡期の足跡を示すものとして、この論文集は史料的に意味を持ってくれるのではないのでしょうか。また、この「探究ゼミ」という学びを創設するに至った思いや、ゼミ自体の変遷も、この論文集から見て取ってもらえることができるでしょう。さらに、生徒たちがこの「探究ゼミ」という新しい形の学びにどう取り組み、どのように思考を深め、成長していったのか、そうした過程も生徒た

ちの文章の中ににじみ出ていると思います。

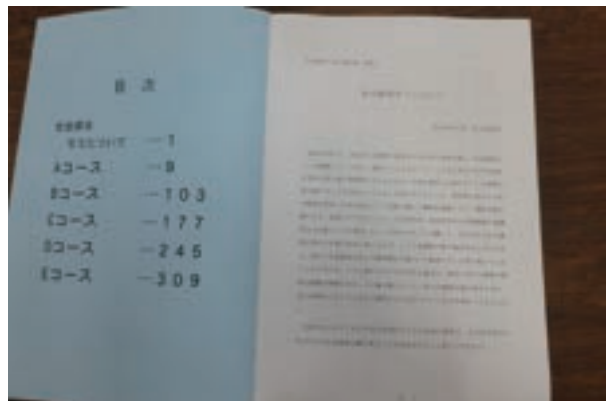
このゼミでの学びがきっかけで大学の進路を決めた、という生徒もいます。そうした生徒がその先も学びを深め、いつの日かアーカイブズに収められた自分の論文を眺めに戻ってきて、自分の人生の原点の再確認をしてくれるような日が来ることを望んでいます。



これまでの論文集



分厚いので、
自立します



1年目の論文集

(南山高等学校・中学校男子部)

48年間お世話になりました

田中 雅行

南山女子部での教員生活も42年目になり、来年3月には定年を迎える。中高6年間は男子部に通ったので、それを含めると南山学園には48年間お世話になったことになる。男子部の生徒だったときは、将来自分が女子部で教員になるなどとは夢にも思わなかった。そもそも、中高時代は教員志望ではなかったのである。しかし、詳しい経緯は省くが、男子部を卒業したことが女子部での教員生活につながっているのは間違いない。男子部を抜きにして南山を語ることはできないので、中高時代の思い出を一つ二つ記しておきたい。

修学旅行は中学が四国、高校が北海道であった。北海道へは夜行列車と青函連絡船を乗り継いで行くのである。寝台車という物に乗ったのは、後にも先にもこのときだけだ。同じ列車に矢沢永吉が乗っていたという話を後から聞いたが、残念ながら自分は見えていない。学校祭で特に強く印象に残っているのは体育祭で、とにかく雨が多かった。当時、男子部の体育祭は雨天決行で、かなりの雨の中でも泥だらけのグラウンドを走り回るのである。高3でクラスが優勝したときも雨が降っていて、記念写真は傘をさした姿で写っている。

当時の男子部には食堂があった。昼食時には中学、高校が一日交替で利用することになっていて、生徒に交じって食事をする先生方もおられた。定食が90円、カレーライスが60円、中華そば（ラーメン）が50円で、定食は5枚綴りの食券があった。メニューはほとんど覚えていないが、カツカレー（90円）があったことは確かである。食堂でよく一緒にいる英語の先生が、いつもカツカレーを食べておられるので、我々生徒は親しみを込めてその先生を“カツカレー”と呼んでいた。

男子部のことはこれくらいにして、ここからは女子部の話を書く。新任として女子部に來たのは1980

年、昭和55年である。当時と今とを比べてみると、実に多くのことが変わっている。40年以上も経てば世の中も学校も変化するのは当然だ。一つ一つ挙げていけばきりが無いが、最も大きな変化は南山女子部が医学部をはじめとする難関大学に多くの卒業生が進む、いわゆる進学校になったことだと思う。1980年代半ばあたりまでは、南山大学および南山短期大学へ推薦で進学する生徒が半数近く（あるいは過半数？）を占めていたと思う。外部受験組は今よりずいぶん少なかった。高3の選択科目には家庭科があり、生徒が調理実習でお菓子を作って持ってきてくれたりするのである。今では考えられないことだ。生徒も教員ものんびりしていた時代であった。

この40年の間の変化を振り返ってみると、新しく作られたり始まったりしたものも少なくないが、一方でなくなったもの、やらなくなったことも数多くある。古い人間としてはどうしても、失われたものを懐かしむ気持ちになる。特に、各種行事に関してそういう思いが強い。たとえば予餞会。女子部では2月のはじめごろに全校生徒で映画を見て卒業生を送ることになっていた。その後、紆余曲折はあったが、いつのまにかなくなった。

あるいは、体育祭終了後の高3の学校祭ウチアゲ。体育祭が終わった後に、高3生が体育館に集まって楽しむ時間があった。気分的には今の（コロナ前の）前夜祭の高3発表に近いかもしれない。バンド演奏や、各種ゲームなど、教員も一緒になってみんなで大騒ぎしたものだ。いつまであったのか、なぜなくなったのかは覚えていない。体育祭といえば、かつては学年ごとに応援の看板というものを作っていた。ベニヤ板4枚ほどに絵を描いて学年を記したものを応援席の後ろに立てるのである。（写真参照）



生徒の背後にあるのが応援の看板



高3の応援

また、昼休みには高3生による「応援」というものがあつた。いわゆる応援団ふうの応援を披露するのだが、和服に白の袴、袴姿で、団長はさらに黒い羽織で勇ましく、所作も口上もカッコイイのである。特に後輩たちはキャアキャア言っていたようだ。看板も応援も、気がつけばなくなっていた。

なくなったわけではないが、内容や形態が変わった行事も多い。中でも、最も変化が大きいのは研修旅行であろうか。手元にある古い修学旅行のしおりを見るとなかなか興味深い。目的地の変更以外にも、かつては中3修学旅行の日程が5月末から6月初めであつたこと、高2修学旅行が今とほぼ同時期だが5泊6日であつたこと（現在は4泊5日）など、様々な違いがある。役割分担に「レクリ・歌集」とあるのも時代を感じさせる。当時、遠足や修学旅行のバスレクでは歌集を作って歌を歌うというのが定番だった。バス内のカラオケなどない時代である。また、中学についてはよく覚えていないが、高校では修学旅行委員というものを組織していた。移動時など、委員長がハンドマイクで生徒を誘導したり、指示を出したりしていた。

個人的に最もなくなったことが惜しまれるのが、修

学旅行最終日の前夜、夕食後に行われるアトラクションである。何をするかというと、クラスごとに出し物を発表する、要するに演芸会である。劇あり、歌あり、踊りありで、事前に準備や練習をし、衣装や小道具も用意して、けっこう本格的である。教員劇もあつたりして、2時間ほどみんなで大いに盛り上がったものだ。小道具などを段ボールに詰めて事前にホテルまで送り、自由時間を利用して最終日まで毎晩のように練習していたときもある。ヒゲダンス（志村けんと加藤茶によるアレです）を生徒と教員が一緒に踊ったり、前校長の西先生が若い頃に“フーテンの東”という役名で登場したりしたのを懐かしく思い出す。みんなで思いきり笑い、楽しい時間を共有する場面は、生徒にとってもかけがえのない思い出になるだろうし、その場にいる教員にとっても忘れられないものとなる。現在の研修旅行ではアトラクションの時間は設けられていない。行事の目的や教育活動上の位置づけが修学旅行時代とは異なっており、スケジュール的にも組み込むことが難しい。それでも、2018年度中3の研修旅行では、最後の夜にレクリエーションの時間が作られ、クラスごとではないが生徒有志や教員によるアトラクションが繰り広げられ、生徒たちも大喜びだったのは嬉しいことだ。



修学旅行のアトラクション

40年以上に及ぶ教員生活を振り返れば、まだまだ書く材料はいくらでもある。変わったりなくなったりしたものを惜しむ気持ちは確かに強いが、一方で根っここの部分にある南山の良さというものは昔も今も変わっていないと感じるのも、また事実である。この先、世の中がどんなに変わっても、その良さだけは失わないでほしいと願っている。

（南山高等学校・中学校女子部）

南山国際の「日本一」

高橋 晴之

南山国際には、多分「日本一」と言って良いだろうと思われるものがある。社会科が保有する、「実物教材」のコレクションである。

中学の社会科、高校の地歴科・公民科では、よく「資料集」を使う。年表や図表が中心だが、建物や美術品などの写真なども掲載されている。これらの写真は、本物を直接見ることが難しいため掲載されているのだが、多くの生徒にとっては（自分自身が中学・高校生だった時も含め）、せいぜい一瞬見て終わってしまう。「ふーん。それで？」ぐらいの関心を引いてくれれば良いが、なかなか記憶に残るものではない。

「実物教材」とは、そのような資料集などに掲載されている写真にある資料の本物、または複製・レプリカ（場合によっては「偽物」も含まれる）である。写真を見るだけの印象ではなく実際に手に取ってみることで、より記憶に残ることを期待するものである。もちろん、全員が関心を持ってくれるとは限らない。それでも、実物に触った感触は、写真よりも記憶に残るのではないかと思っている。

叔中の旧校舎時代はスペースの制約から、社会科が所有していたのは教材会社が出していた大判写真と、個人所有の細かいもの（地理で使った「ロッテガーナチョコレート」の包装紙など）ぐらいだった。学校が移転した時に小教室を一つ「社会科資料室」として確保できたことで、実物教材を置いておく場所ができた。それから30年近くの間、社会科の専任や非常勤の教員によって持ち込まれ、形成されてきたのが現在の実物教材コレクションである。



上：火縄銃（レプリカ）



下：行田稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣（木に写真を貼ったもの）

国際校には地理・日本史・世界史・公民の各分野にまたがって、本物の資料や複製、写真の絵葉書、ペットボトルのラベル、食玩や包装紙なども含み700点を超える現物資料と、500点を超える貨幣・紙幣がある。このほかに、学校予算で購入した教材会社の現物資料複製セットが数種類ある。数の上からも、社会科の各分野にまたがるコレクションとしても、私の知る限り日本の中学・高校が所有する実物教材としてはトップクラスである。「地理」だけ、「日本史」だけ、ということであれば南山国際を超えるコレクションもあるが、社会科の全分野にわたるものでは、おそらく現在の日本の学校が持つ現物教材コレクションとして、これを超えるものはないだろうと思う。特に、数は少ないが、海外から帰国した生徒から寄贈されたものの中には、日本では入手困難なものもあり、帰国子女の学校としてのメリットが示されている。



左：Mappa Mundi（中世の世界地図）



中：マグナ・カルタ



右：黒船来航時の瓦版（レプリカ）

現在生産されているのではないものが多いため、見つけた時に購入しなければ、後で入手できない。そのため予算だてができず、ほとんどは個人所有である。前述のように「本物」ばかりではない。正確な複製もあれば、偽物もある。実は教材として使うなら、高価な「本物」より、安価な複製や偽物で十分である。特に偽物は、本物と誤認させようとするため、本物の持つ特徴をより強調しているので、かえって本物より説明しやすいこともある。



コーラン章句柄小型絨毯

かならずしも全部が使えるわけではない。提示しようと準備しておいても、授業の進行で時間が不足すれば出せないし、かつては教科書などに重要項目として示されていたが時代の変化で教科書から消え、使われなくなったものもある。しかし実物教材とは、さまざまな分野で過去あるいは現在の人々がやってきたこと、やっていることを伝えるという性質を持つものである。ちょうど、学園アーカイブズに収蔵されている史資料が持つ、「南山学園」や「神言会」という組織に関わってきた人々がやってきた

こと、やっていることを伝えるという性質と基本的に同質のものであろう。

南山国際の閉校によって、この実物教材コレクションは学園の他の単位校などに分散するであろうが、もし授業で一つでも使っていただいて、生徒に「へえ、こんなものがあるんだ。」と関心を持たせることができれば、それはそれで十分な意味があると思う。



左上・左下：初ネーデル人種が作った石器
 右上：磨製石器（縄文時代） 中：骨製の釣り針（縄文時代）
 右下：石匙（縄文時代）

学園アーカイブズに展示されている史資料を見る人は、そこにある史資料と直接のかかわりを持たない人だろう。しかし、「同じ学園の先輩たちが何をやって、どのように生きてきたか。」ということに思いをはせるきっかけとなれば、展示する意味は十分にある。現在は南山国際にある実物教材も、他の学校に譲渡されたとしても、将来にわたってそのような役割を果たしていってほしいと思う。

（南山国際高等学校・中学校名誉教諭）

探ろう！私たちの学校に込められている『こころ』

—子ども版南山小12周年記念誌をつくろう—

水越 建太

2020年度は、南山大学附属小学校（以下、現南山小）のカリキュラムの中に「とびら」の時間が位置づけられました。これは、今までは英語やその他の時間を使って進めてきた、自主的・主体的な探究学習を、教科として独立させたものです。「とびら」という名称は、校歌「こころのとびら」の以下の歌詞から採用されています。

開いてみよう こころのとびら
のぞいてみよう 未来のとびら
くぐってみよう 世界のとびら
ここからはじまる 南山小学校

まさに未知の世界である、自他の心や時間・空間を越えた世界を探究することを中心とした教科らしい名称となっています。

しかし、新型コロナウイルスが広がっていく中、ダイナミックな活動ができない中での新教科の船出となってしまいました。そんな中ですが、5年生では、自校史学習をもとにした探究学習として、「探ろう！私たちの学校に込められている『こころ』 ～子ども版南山小12周年記念誌をつくろう～」を行いました。自分たちの学校に込められたたくさんの人の思いを知ること、「真のリーダーシップ」とは何か、「自分に与えられた使命」とは何かを思索し、南山学園のファミリーの一員であるという自覚と愛着を育むとともに、残りの小学校生活に対して信念をもって生活していくための心の拠り所としてほしいと考え、学習を進めていきました。つまり、本校の「過去・未来」に込められた人々の思いや願いを知ること、自分自身が「未来」への懸け橋となるために、これからどう生活していくべきか語れるようになってほしいと考えました。



児童による表紙（上）と挿絵（下）

初めに、戦前の南山小学校（以下、旧南山小）の児童であった方による未完の紙芝居「銀河鉄道の夜」を、現南山小の全校児童が協力して完成させたプロジェクトのニュース映像を視聴し、過去・現在を未来につなぐ活動の魅力・意味に気付きました。その後、旧南山小の方が涙ながらに語られた子どもたちへのメッセージ、校歌の作詞者である渡辺義和先生が完成した校歌を聴きながら涙を流されている映像を子どもたちは見ることで、この学習の目的、意味、願いを確かめました。その後、2018年度に出版された「南山小創立10周年記念誌」をもとに、この子ども版を作成することで、南山小の過去・現在・未来をつなぐ懸け橋となることを目指しました。

子どもたちは、3つの時間軸「旧南山小」「現南山小設立前後」「現在」の、3つの視点＝「ひと」「もの」「こと」の中から、自分が興味をもったものを個人の探究テーマとして設定しました（表1）。

	ひと	もの	こと
旧南山小	3人の神父様・先生 児童の生活・学習	制服・校章・わかみどり・校舎・校名の由来・教科書	旧校舎が空襲に遭ったこと・廃校について 教育モットー・行事 今にうけつがれていること・真教育
現南山小 設立前後	先生・旧南山小OBの方・3人の神父様・委員会・卒業生・	聖家族像・エンブレム・聖堂・校舎内の十字架・ステンドグラス・制服・筆箱・ランドセル・	小学校の復活・校歌 行事・ハ事小との関わり・
現在まで	姉妹校・保護者会わかみどり・	南山小のキャラクター・新旧の比較・多治見修道院・聖歌・紙芝居「銀河鉄道の夜」	宿泊学習・アフタースクール・南山っ子フェスティバル・掃除・ロング昼休み・十周年記念行事

表1 主な児童の探究テーマ

早速、南山アーカイブズの展示室をはじめ、10周年記念誌や、様々な先生方へのインタビューなど、コロナ禍の状況においてできる限りの情報収集を行い、探究を進めました。また、この学習を通して、ただ自校史の知らなかった事実を淡々と記事に書くだけでなく、探究の過程で、最高学年を目前にした5年生としての思いや過去現在を未来につなぐ「橋」となっていく意志や母校への愛着をより強くもってほしいと願っていました。そのため、「結論」に何が書けるかが一番のポイントでした。児童の記事の一部をご紹介します。

『歴史をつないだ新南山小』

私は、新南山小設立前後の「もの」について調べました。南山アーカイブズや資料を見て、たくさんを知りました。（略）

聖家族像は、菩提樹の一本木から掘り出されました。聖家族像背景の壁はイタリアから取り寄せた貴重なガラスモザイクで彩りました。ここを通るたびに、お父さんもお母さんも、皆さんを大事に育てているということを思い出してほしいという「こころ」が込められています。（略）

私は今回、南山アーカイブズに行ったり、自分で調べ、「私たちのことを大切にしている」「前向きになってほしい」などの「こころ」があることを知ったので、もっと周りの人に伝えていき、これからの自分へとつなげていきたいと決意しました。

自校史を学ぶことは、ただ歴史的事実を情報として知ることが目的ではありません。学校に関わる「ひと・もの・こと」の奥にある「こころ」を徹底的に探究していくことで、これからの自分の生き方づくりや、自分の使命を自覚することに繋げられる魅力をもっているのです。



児童の記事の一部

（南山大学附属小学校教諭）

続・南山学園の戦争遺跡

永井 英治

前稿（「南山学園の戦争遺跡」『南山アーカイブズニュース』第7号、2014年11月）発表後、南山学園の戦争遺跡について、さらに情報を得ることができた。ここに続編として書きとどめ、さらなる情報を求める縁とした。

ひとつは、1970年、南山短期大学専用のキャンパスの新設工事で、傾斜地の一部を掘り下げたところ、「縦横に走る」防空壕跡が発見されたというものである。南山短期大学のキャンパスは、アントニン・レーモンドの最晩年の作であり、キャンパス建築のため、発見された防空壕跡はすべて壊された。これは、南山アーカイブズ第1回企画展「南山学園とアントニン・レーモンド」準備の過程で、『日刊建設通信』（1971年4月30日）の記事を確認した結果である。

ふたつめは、ライネルス館の防空壕跡に関するふたつの情報である。ひとつは、校庭側入り口から入った所にある階段下のスペース横に、コンクリートで四方と天井を固めた防空壕跡が今でもそのまま残っていること、もうひとつは、正面玄関側で、道路に沿って防空壕跡が地下に残っているという情報であった。前者は現在でもみることができる。後者については、建設会社に依頼してボーリング調査をした記録の存在もわかった。その時の防空壕跡の推定図も残っている。この記録の所在とともに、女子部校舎の新築に際してもやはり防空壕跡が見つかったこと、さらに、ライネルス館向かいの住宅地でも防空壕跡が見つかったことがわかった。また、これらの情報から、ライネルス館から女子部敷地にまで通じるかなり長い防空壕があったらしいこともおぼろげながらわかってきた。

以上を整合的に考えると、ライネルス館道路側の防空壕跡は、地下通路というべきであり、これが女子部敷地に通じ、傾斜地の下で防空壕として伸びていたことにな

る。現状では、破壊された部分が多く検証は困難であるが、かなり大規模な地下施設であったと考えられる。しかし、ライネルス館内の防空壕跡から地下通路に辿り着くにはさらに掘り下げる必要があるが、現状ではそのような形跡は確認できないため、名古屋陸軍造兵廠・名古屋師団に貸与されていた時代（賃貸契約書は1944年2月6日と1945年1月21日に作成されている）に、それらがつながっていたか否か判断できない。また、現時点では、ライネルス館の防空壕を覆うコンクリートがいくつかの物であるかもわからない。

このように、不明なことばかりであるが、ライネルス館から現在の女子部敷地に通じる長大な地下通路とそこから「縦横に」延びる防空壕があったとすれば、「屋上に機銃を設置した名古屋連隊区司令部庁舎」は想像以上に重要な機能を期待されていたのかもしれない。

という訳でさらなる情報を期待しています。

（南山アーカイブズ／南山大学国際教養学部教授）

南山アーカイブズニュース 第14号

Nanzan Archives News

発行日	2021年11月1日
編集・発行	南山アーカイブズ 名古屋市昭和区五軒家町6番地
印刷	株式会社クイックス 名古屋市熱田区桜田町19-20